

## 聖徳太子とその周辺の人々

〜近親結婚の背景〜

駒澤大学名誉教授

石井公成



この講演は、「聖徳太子とその周辺の人々―近親結婚の背景―」という題名になっています。結婚と言えば、たまま本日の少し前が私の結婚記念日ですので、題名を変え、私と家内の結婚について五時間くらい話したいところが、さすがにそれはまずいでしょうから、元の題名で話させていただきます。

ステージに第一講座の演奏で使われたピアノがあるのは、何となく嬉しいですね。家内は音楽の教師なのですけど、私も音楽や芸能が大好きであって、『へものまね』の歴史―仏教・笑い・芸能―という本を書いたくらいです。「聖徳

二二一

太子研究の最前線」というブログは本名でやっており、そこに書いたことをまとめて『聖徳太子―実像と伝説の間―』という本にしましたが、実は、今は閉じてしまっているものの、ジャズを中心とした音楽ブログと、古代から現代の笑いにまで至る様々な芸能を扱った芸能ブログも匿名でやっておりました。その芸能ブログに書いたことを元にしてまとめたのが、この『へものまね』の歴史』です。音楽ブログの内容は、本にできるかどうかわかりません。私は定年退職後は、深夜のマニア向けのラジオ番組を持って、「こんばんわ。土曜の夜は『コウセイの音楽芸能百年』の時間です」などとやりたかったのですが、人生は思うようになりませんね。

さて、ものまねを含め、日本の芸能はまさに聖徳太子から始まると言われています。数年前、奈良で「聖徳太子と芸能」という公開シンポジウムをやった際、私が基調講演をしてディスカッションに移り、そのあとで東儀秀樹さんの雅楽の演奏がありました。すると古式ゆかしい狩衣姿で笙の笛を吹きながらステージをゆっくり歩き回っていた東儀さんは、私たちが最前列で座っている所の前までくると、我々に軽く頭を下げました。なぜかという、彼のご先祖は聖徳太子にお仕えした秦河勝という人であって、我々が「秦河勝は芸能面でこれこれの役割をしたと伝えられています」といった話をしたため、東儀さんは感謝の気持を示したのですね。

とにかく聖徳太子は多分野にわたる活動をしていますので、いろいろな話ができるのですけれども、浅草寺さんは庶民的なお寺ですので、庶民的な話として、太子には奥さんが四人いて嫉妬合戦もあった

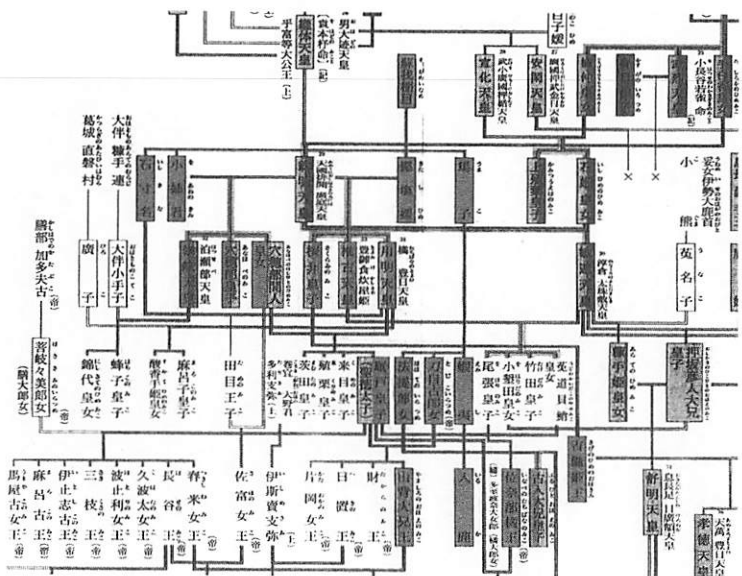
二二二

といったことを含め、太子周辺ではいかに近親結婚が多かったのかというテーマを選ばせてもらいました。

聖徳太子と言えば、「聖徳太子はいなかった。実在してそのモデルになったのは、パツとしない厩戸王だ」という悪い冗談がありましたね。文部科学省もそれに乗っかり、指導要領改訂の際、歴史の教科書では聖徳太子という名より厩戸王という名を先にこそと大騒ぎになったのですが、これほとんどでもない話です。厩戸王というのは戦後、広島大学の教授となった小倉豊文氏が、「聖徳太子は超人的なイメージが強すぎる。本当の聖徳太子の姿を研究するには、生前に呼ばれていた名前前で呼ぶのが適切だ。最も可能性があるのは『厩戸王』だろう」ということで推定した名前なのです。このことは、私が早くに指摘しておいたのですが、文科省や改訂に賛成した人たちだけでなく、「日本の伝統を守れ」と主張して大反対した人たちも、「厩戸王」という呼び方は古代の文献にはまったく出てこないことに気づかず、あれこれ議論して国会討論にまでなったのは、誠に情けないことでした。

ここで本題に入ります。皆さんのお手元の資料にある家系図のうち、起点となるのは欽明天皇です。この欽明天皇の時代に渡来人を活用してのしあがり、大臣となった蘇我稲目は、堅塩媛と小姉君という自分の二人の娘を欽明天皇の妃にしています。欽明天皇と堅塩媛の間に生まれたのが用明天皇とその妹の豊御食炊屋姫、つまり後の推古天皇であって、欽明天皇と小姉君の間に生まれたのが穴穗部間人皇女と崇峻天皇です。このうち、異母兄妹である用明天皇と間人皇女が結婚して聖徳太子が生まれます。つ

まり、父方・母方とも蘇我氏の血を引く最初の天皇候補者です。さらに、堅塩媛と小姉君よりかなり年下ですが、稲目は石寸名という娘を、用明天皇の妃にしています。



(石田尚豊編『聖徳太子事典』柏書房)

つまり、稲目は、妻たちから生まれた娘たちを、天皇ないし天皇になりそうな皇子の妃として送りこみ、そこで生まれた子たちが次の天皇となっていたのです。まさに外戚政治ですね。この時期、天皇となった欽明天皇の皇子・皇女たちの中で、蘇我氏の血を引いていないのは、欽明天皇の皇后であった石姫皇女から生まれた敏達天皇だけです。なお、天皇とか皇后というのは、後の律令制によって定められた称号ですが、わかりやすくするため、ここでは一般的な称号で呼んでおきます。

さて、敏達天皇は蘇我氏の血を引いていないのですが、蘇我系である異母妹の推古天皇を后としました。蘇我氏との関係がなければ、天皇にはなれなかった時代です。現代の天皇家の血筋につながる

最初は、欽明天皇の父である継体天皇けいたいです。ただ、この継体天皇は応神天皇おうじんの五世の孫とされ、越前な  
いし近江に住んでいたと伝えられています。五世の孫って何ですか。天皇の子どもや孫くらいの人が天  
皇になるのは分かりますが、天皇の孫の子どもの子どもなんていったら、もう遠い親戚程度であって、  
皇族とは言いがたいですね。そうした地方在住で王家の血筋とつながっていたかどうか怪しい継体天皇  
が即位できたのは、前の前の天皇の皇女である手白香皇女たしろかのみぎを后としたからです。そして蘇我氏が権勢を  
振るう時代、つまり継体天皇の子の欽明天皇の代になると、皇女との結婚に加え、蘇我氏の女性を妃と  
して迎えることが求められたようです。

こうした状況のもとで、ともに蘇我氏の血を引く異母兄妹である用明天皇と間人皇女まひとのみぎが結婚して聖  
徳太子が生まれます。太子が生まれたのは用明天皇が即位する前ですが、蘇我氏にとっては期待の星で  
す。当時の結婚は、男性が夜、女性の家を訪れる形であって、子供は母の家で、つまりは祖父の家で育  
ちます。蘇我氏は様々な技術を持っていた渡来人たちを活用してのしあがった一族ですから、父方・母  
方とも蘇我氏の血を引く有望な天皇候補であった聖徳太子は、早くから蘇我氏のもとで当時としては国  
際的なエリート教育を受けたと考えられます。

さて、太子のお父さんである用明天皇が亡くなると、用明天皇の異母弟であり、太子の母后の弟であ  
る崇峻天皇が即位しますが、崇峻天皇は馬子と対立して殺されてしまいます。その混乱の中で、馬子の  
推挙を受け、馬子の姪であって蘇我氏の血を引いている推古天皇が即位します。ここからが衝撃です。

太子の父である用明天皇は、先ほど述べたように、稲目の年若い娘であったと思われる石寸名も妃とし  
ており、田目王子ためのみこという子どもをもうけていました。太子が一四歳の時に用明天皇が亡くなると、その  
何年後であったかは不明ですが、未亡人となった間人皇后は、その田目王子と結婚します。つまり、夫  
の子ですから義理の息子ですし、叔母の子ですから甥でもある田目王子と結婚し、佐富女王さほのみぎという娘を  
生むのです。

昔は、「聖徳太子は、未亡人となった母がその義理の息子、太子から見ると異母兄と結婚して子を生ん  
だことに衝撃を受け、心を痛めて仏教に惹かれるようになった」と考えた人もいますが、おそらく  
違います。これまで述べてきたように、この当時の天皇家には近親結婚がたくさん見られました。天皇  
の娘、つまり内親王は身分の釣り合いがとれる結婚相手がなかなかいないため、結局周りの皇族と結婚  
しがちだったのです。もう一つの要因は財産です。当時は男だけでなく女の人も自分の財産を持ってい  
ました。そうした女性が他の一族の人と結婚して亡くなると、財産はそちらにいつてしましますが、皇  
族内部で結婚していれば財産は分散しません。そして、最も重要な要因は、先ほど述べたように、天皇  
となるためには、前の天皇かその前あたりの天皇の皇女と結婚している必要があったことでしょう。

ともかく、聖徳太子のお母さんは、夫の用明天皇が亡くなると、夫と別の女の人の間に出来た子で  
ある田目王子と結婚し、女の子を生みました。それが佐富女王です。佐富女王は、後に聖徳太子とその  
最愛の妃と言われる善岐岐美郎女よしかきみのいらつめの間に生まれた長谷王はせのみこと結婚し、一男一女を生んでいます。長谷王

から見れば、佐富女王は祖母の娘であり、また父である聖徳太子のかなり年下の妹ですから、叔母と甥の結婚です。とにかく徹底して内部婚をしているのです。義理の息子と結婚というと驚きますが、聖徳太子の母后は若いうちに用明天皇と結婚したようで、甥でもある義理の息子とは極端な歳の差はなかったようです。しかも、この母后は、晩年は聖徳太子の斑鳩宮いかるがのみやの一角に住んでいましたので、仲は悪くなくかつたんですね。

では、聖徳太子自身はどんな結婚をしたか。結婚した順序は分かりませんが、先ほど述べたように、叔母である推古天皇の皇女、菟道貝蛸皇女うじのかいたこのひめみこと結婚しました。叔母の娘ですから、いとこ結婚したことになります。史料ではこの時代の結婚については、「娶」という字が使われています。すごいですね、女偏に「取」ですよ。この「娶」の字を日本では「妻」を取るということで、「めとる」と訓みました。これは完全に中国の発想です。中国は儒教の国ですので男性中心主義であって、男の家<sup>よ</sup>に他の氏族の女性を迎えて結婚するわけですが、女性の姓は変わりませんし、亡くなると夫とは別な場所に埋葬します。ところが日本は「ツマ問い婚」であって、実家に住んでいる女の人のところに、男が夜訪れていって一晩過ごして朝帰っていきます。ですから、古い訓ではこの「娶」の字を「みあう」と訓んでいました。成人した男女はあまり顔を合わせませんでしたので、男女間について「見る」という言葉を用いる場合は、相手の顔を見ること、つまり夜をともし、結婚することを意味したのです。

こうした状況であるため、義江明子先生は古代の史料に見える「娶」の語については、「めとる」では

なくて「みあう」と訓むべきだと主張されています。なお、子供が生まれることについては、古代では父親についても「生む」という言い方をしました。つまり、「誰々とみあつて誰々を生んだ」という言い方をしたのです。

さて、聖徳太子の結婚相手の話に戻りますが、菟道貝蛸皇女については記録がありません。子どもが生まれないと記録に残らないんですね。貝蛸皇女に次ぐ格式の女性としては、大臣であった蘇我馬子の娘、刀自とじ古郎女このらつめと結婚しています。長男で後継ぎとなる山背大兄王やましろのおえのおうや片岡女王など四人の子どもが生まれており、片岡女王は七十いくつかまで長生きしたようです。聖徳太子は一族が皆殺しにされたなどという人がいますが、これは後代の太子伝になればなるほど殺されたという人数が増えていったためです。太子が亡くなった後、滅ぼされたのは、太子の長男であつて天皇になりたがつて運動して蘇我本宗家の反発を招き、殺された山背大兄王とその家族だけです。

このように、太子は天皇の娘と結婚していたうえ、実質上の最高権力者である大臣馬子の娘をもらっていたんですね。推古朝の時期には、聖徳太子の宮があつた斑鳩と飛鳥の都を斜め一直線に結ぶ幅二〇メートルほどもある太子道があつたのであつて、その一部が発掘されていますが、日本の総理大臣で、国会議事堂から自分の娘婿の選挙区まで二〇キロもの直線道路を作れる人がいるとしたら、田中角栄総理くらいなものでしょう。太子はそうした権勢の持ち主だった馬子の娘と結婚していたのです。斑鳩は外国使節を迎える難波の港と都の飛鳥の中継点にあり、重要な拠点だったわけですが。

次に、太子は斑鳩近辺の豪族であった膳かしののぢみ臣加多夫古の娘、善岐岐美郎女よきまのいらつめと結婚しています。この善岐岐美郎女は八人もの子を産んでおり、太子とともに病床について一日違いで亡くなっていますので、最も愛された妃と言われています。ただ、普通の豪族の娘ですから、身分は高くありません。

問題は、太子とこの善岐岐美郎女の間生まれ長女の春米女王つばしのめいこが、太子と刀自古郎女やぶらつめの間に生まれた長男である山背大兄王と結婚していることです。これまた異母兄妹婚ですね。この山背大兄王と春米女王が、斑鳩宮や、有力な皇子の養育料として太子に与えられていた乳部ちちぶと呼ばれる領地・領民を継承したようです。

そして太子が最後に結婚したのが、推古天皇の末の皇子である尾張王の娘、橘大郎女たちばなのおいらつめです。おそらく、菟道貝蛸皇女うぢのいづほが子を残さず亡くなったため、推古天皇は自分とのつながりを保つために孫娘を太子に与えたのでしょう。聖徳太子からすると、いとこの娘との結婚であって、一男一女が生まれています。太子には実際には他にも妻がいたと思われませんが、史料に残っているのは、この四人です。なお、推古天皇は娘の小墾田皇女おほりだのひめぎを、夫の敏達天皇と広姫という女性の間おほしきみひこに生まれた押坂彦人皇子と結婚させています。つまり、蘇我系と蘇我系でない二人の有力な天皇候補者のどちらにも自分の娘を与えておいたのであって、小墾田皇女と押坂彦人皇子も異母兄妹婚ですね。

さて、法隆寺金堂の釈迦三尊像銘によると、聖徳太子のお母さんが推古天皇二十九年の十二月に亡くなります。その後、正月に太子が病気になる、看病していた善岐岐美郎女も病気になる、ともに寝込み

ます。おそらく伝染病でしょう。そして、二月二十一日に善岐岐美郎女が亡くなり、翌日、太子も亡くなります。一緒に病気で寝込んだということは、善岐岐美郎女の住む宮で過ごす時間がおそらく最も多かったということですね。釈迦三尊像銘によれば、「太子が病気になるため、回りの者たちが悲しみ、等身の釈迦像を作ること誓願して回復ないし往生を願ったもの、果たせないうちに太子も王后も亡くなった。造像を誓願した仲間たちは、この造像の功德によってこの世では安穩に暮らし、亡くなったら何度生まれ代わっても三人の主、つまり、太子とその母后と王后にお仕えして仏教を広めたい」と願っています。ということは、この造像仲間は、王后の実家である膳氏や太子一族に仕えていた他の氏族などが中心だったということですね。他の妃の子供たちが、自分の母をさしおいて、善岐岐美郎女に来世でもお仕えしますなどと誓うはずはありませんので。

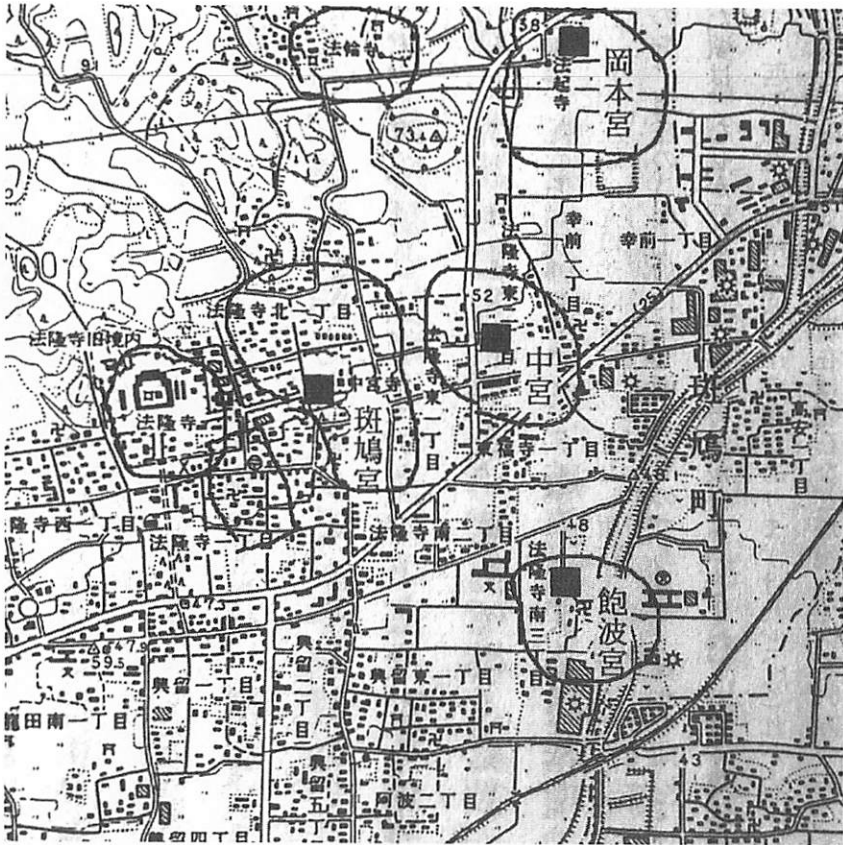
問題は残された橘大郎女です。この人は天皇の孫娘であるため、プライドが高いわけです。そこで、太子が亡くなると、悲しくてしかたないため、太子が往生したであろう浄土の様子が見たいのです、と祖母の推古天皇にお願ひし、その様子を描いた「天寿国繡帳てんじゆこくしゆうちやう」という刺繡の大作をつくってもらいます。この繡帳には銘文が縫い付けられているのですが、「欽明天皇と蘇我稻目の娘の間に用明天皇と推古天皇が生まれ」という趣旨の文で始まり、聖徳太子と自分がいかに天皇家と蘇我氏の血を引いているかを強調した系譜が全体の五十五%を占めており、末尾はこの繡帳の作成を指導した渡来系氏族の技術者たちの名が列記されています。

この繡帳と銘文には偽作説があるのですが、聖徳太子の神格化が進んだ後代になって、「太子は観音菩薩の化身です」といった文章を作成するならともかく、こんな偽作をつくってどうするんでしょう。しかも後半では、橘大郎女が「太子のお母様が病気で亡くなると、太子はまるで約束したようにあとを追われました。悲しくてたまりません」と推古天皇に訴え、気の毒だということで推古天皇がこの繡帳を作らせたと書かれています。皆さん、おかしくないですか。太子とほぼ同じ時期に病気になってともに病床に臥し、太子と一日違いで亡くなったのは、豪族の娘であって八人の子を産んでいる菩岐岐美郎女ですよ。ところが、橘大郎女は「私は天皇の孫娘だ」というプライドがあるものですから、そんな田舎の豪族の娘のことなどには一言も触れません。出てくるのは聖徳太子の母后と、聖徳太子と、「私」だけです。「天寿国繡帳銘」の中心人物は太子ではなく、橘大郎女なんです。

さて、こうした太子の妻たちはどこに住んでいたか。仁藤敦史先生が太子の住んでいた斑鳩宮の研究を進め、妃たちは斑鳩のそれぞれ別の宮に住んでいたことを明らかにしました。この図（次頁）で言うと、先ず左端の丸は法隆寺です。ただし西院伽藍と呼ばれる法隆寺は、天智九年（六七〇）に焼けたものを、現在のこの土地に建て直したものであって、真北を向いています。ところが聖徳太子が生きていた頃は、なぜか分かりませんが方角がちよとずれており、建物も道も西に二〇度ほど傾いているのです。西院伽藍の東南方向に卍の印がありますけれど、これが太子の建てた元の法隆寺です。当時は、斑鳩寺とも呼ばれており、現在は礎石などが残っているのみであって、若草伽藍と呼ばれています。この

一一二

一一三



若草伽藍は、中門・五重塔・金堂が一直線に並ぶ四天王寺式の配置であって、西に二〇度傾いています。

その右隣の黒い四角は、夢殿を中心とする法隆寺東院です。ここに聖徳太子が住んでいた斑鳩宮という宮があったのです。むろん、西に二〇度傾いていました。この宮は、山背大兄王が天皇になりたいて運動して蘇我氏の本宗家と衝突した時に、蘇我蝦夷の軍勢に攻められて焼かれ、焼け野原になってしまいました。その荒れ果てた様子をいつも目にして悲しんでいた奈良時代の法隆寺の行信とい

うお坊さんが、光明皇后に働きかけてここに太子を祀る夢殿を作り、聖徳太子の神格化を進めました。八角形になっているのは、当時の天皇のお墓は八角形であることに準じたためです。このあたりは現在は東院伽藍と呼ばれています。

その東院伽藍のすぐ東隣には、現在は中宮寺が建っています。しかし、昔は五〇メートルほど東に行ったあたり、地図では四角のしるしのところに太子の母后が住んでいた宮があり、それを後に中宮寺としたのです。斑鳩寺は僧侶の寺ですが、昔は男性僧侶の寺と女性の尼寺を五〇メートルくらい離して建てるが多かったようです。尼寺は男のお坊さんが監督するため、あまり近いと尼さんの姿が目に入って男性僧侶の修行の邪魔になるし、遠すぎるといざという時に助けに行けず、教えにも行けないというので、大体、鐘の音がよく聞こえる距離ということで、五〇メートルくらい離して僧侶の寺と尼の寺を建てるというのが当時は多かったのです。

ただ、太子や母后が生きていた頃には、中宮寺は建立されていなかったと思われます。若草伽藍と共通する瓦が少しだけ発掘されていますので、母后がここに住んでいた頃、あったのは小さなお堂でしょう。宮の片隅に小さなお堂を建て、仏像を置いて礼拝し、家庭教師役の尼さんの指導を受けて仏教を学ぶという程度だったと思います。

一番上の四角の箇所は岡本宮と言ひ、馬子の娘である刀自古郎女がいたところであつて、そこで『法華経』の講義をしたという伝承があります。そこに法起寺ほつきじがありますけれども、岡本宮を建て直したの

が法起寺です。そこからさらに西の方に行くとな法輪寺がありますが、これは息子の山背大兄王が建てたらしい。法起寺が尼寺で、法輪寺が僧侶の寺です。

問題は地図の右下の四角です。ここは太子が最も通ひ、善岐岐美郎女とともに亡くなった飽波宮あきなみやだろうと推測されています。ここは上宮遺跡かみやと言ひますが、この地名は、聖徳太子が上宮王じやうきやうと呼ばれたことと関係があるのでしよう。この地には現在は成福寺じやうふくじというお寺が建っており、重要文化財に指定されている聖徳太子立像があります。

つまり聖徳太子は斑鳩の中央に斑鳩宮を建て、すぐ西隣に法隆寺を建てたのであつて、その周辺に妃たちの宮を配置したのです。宮とお寺が並ぶように造るといふのは聖徳太子が最初です。太子以後では、推古天皇のあとを継いだ舒明天皇じゆめいが踏襲しますが、当時はこれが最先端の形ですね。このようにして、斑鳩宮を中心にして斑鳩の地のあちこちにお妃のいる宮があり、聖徳太子は「今日はどこどこのお妃のところへ行く」という形の結婚生活をしていたわけです。広い建物のなかに女の人がたくさんいるといふのは中国の皇帝です。

推古天皇の孫娘はどこで暮らしていたかを示す資料はありませんが、皇族ということで太子の母后がいた中宮に住んでいたのか。問題は、この当時の資料を女性中心の目で見なくてはいけないということです。先ほど触れた「天寿国繡帳銘」では、「我が大皇おほみかみ」、つまり聖徳太子は、日頃「世間虚仮こけ、唯仏是真まこと（世間は虚しい、仏だけが真実だ）」と語っておられたから、きっと天寿国に生まれただろうと記して

いますが、「天寿国」という言葉はありません。これは、橘大郎女が考えた国ですね。

聖徳太子が「世間は仮である。仏だけが真実だ」といった場合、「世間」とは一体何を指していたのか。政治的なことか。聖徳太子は父方・母方両方とも蘇我氏の血を引く最大の天皇候補者ですけれども、飛鳥の都から二〇キロも離れた斑鳩の地において、だんだん蘇我馬子とうまういなくなつたという説もあります。『日本書紀』の推古紀では、聖徳太子は晩年の一〇年位はほとんど記録がないのです。ちよつとおかしい感じがします。「世間虚仮」というのは「ああ、政治の世界は虚しい」ということなんでしょうか。

家族に問題があつたとしたら、「ああ、家族は煩わしい」ということになりますね。妻たちの嫉妬合戦がひどかつたりしたのか、あるいは長男の山背大兄王の出来が悪かつたり親子で対立したりしたのか。『上宮聖徳法王帝説』という書物では、山背大兄王について、「賢尊の心」があり身を捨てて人民を愛したと述べ、「後の人が父の聖徳太子と違ふと言ふのは正しくない（後人父聖王相濫非也）」と主張しています。そうした反論をするということは、批判がかなりあつたということですね。「相濫」というのは、まざつてしまふという否定的な意味の仏教用語であつて、中国古典には見えませんので、山背大兄王を批判する僧侶たちがいたことになりました。

山背大兄王とその家族が減ぼされたのは、馬子の後を継いで大臣となつた蘇我蝦夷とその子の入鹿が権勢を振るい、有力候補だつた山背大兄王をさしおいて、馬子の娘と結婚していた田村皇子を即位させ

て舒明天皇とし、舒明天皇が亡くなると、またしても山背大兄王を退けて舒明天皇の後だつた宝皇女を即位させて皇極天皇としたことが背景です。天皇になろうとしてしきりに運動していた山背大兄王は邪魔だつたのです。斑鳩にいた山背大兄王は皇女と結婚していませんが、用明天皇の孫であつたうえ、天皇に準じる存在であつた聖徳太子の娘と結婚していますので、有力な候補者ですが、蘇我氏の女性と結婚せずに斑鳩の上宮王家の内部だけで完結しているのですから、自分たちに都合の良い天皇候補者を選ぼうとしていた飛鳥の蘇我本宗家としては、警戒せざるを得ない相手だつたでしょう。

しかも、当時は天皇も氏族も兄弟相続が普通であつて、誰かが亡くなると、その同世代の兄弟が年齢や能力を考慮して選ばれて即位し、その世代で候補者がいなくなると、一つ下の世代に移っていました。蘇我氏の長は、稻目↓馬子↓蝦夷↓入鹿であつて、珍しく直系相続でした。これには反発もあつたようで、馬子の弟とも蘇我氏傍系の豪族とも言われる有力な境部摩理勢は、熱心に山背大兄王を天皇候補として推薦しており、蝦夷と対立して殺されています。あるいは、摩理勢は娘を山背大兄王と結婚させていたのではないかと疑われるほどです。

こうした対立の構図は、聖徳太子の生前から芽生えていた可能性もあります。そうであれば、世の中に嫌気がさすことがあつても不思議はありません。仏教復興に熱心だつた隋の文帝は、僧侶に皇子たちを指導させました。皇子たちには贅沢な暮らしを続けた者、仏教を利用しようとした者など多岐にわたりますが、そうした中で、三男の泰王俊は僧侶になりたいと願うほどの奉仏家であり、多くの僧侶と関係を



持っていました。百済くだらや高句麗こうくりから派遣されてきた学僧たちとともに仏教研究を深めていった聖徳太子が、政治面あるいは家族面で思うようにならないことが増えていけば、「世間虚仮、唯仏是真」とつぶやきたくなつたとしても不思議はないのです。実際、太子の没後には、橘大郎女が昔岐岐美郎女に対するライバル心をむき出しにした「天寿国繡帳」を作成してもらっていますし、入鹿が派遣した軍勢によって斑鳩宮が焼かれ、長男の一家はすべて殺されました。晩年の太子は、近い将来、何かしら問題が起きることを懸念していなかったか。

日本では、大王には有力な豪族が娘を結婚させて支援しており、最初は葛城氏、次が和仁氏わに、次が蘇我氏です。藤原氏（中臣氏）はその蘇我氏の本宗家を打倒したものの、その方式を受け継いで長く権勢を握っていました。問題は聖徳太子一族です。先ほどの系譜を見てください。太子の母后にしても山背大兄王にしても、聖徳太子一族の結婚は、内部で完結してしまっています。太子一族は、蘇我氏の血を濃く引いてはいるけれども、山背大兄王の代になると、蘇我氏の娘をもらおうとしておらず、蘇我氏にとっては邪魔な存在となり、滅亡させられたのです。蘇我氏系の近親結婚によって聖徳太子という優秀な存在が生まれましたが、聖徳太子一族が滅びてしまった原因の一つも近親結婚であったと言つて良いように思われます。

ということ、聖徳太子を考える際には近親婚ということが非常に重要な要素となるということをお話しさせていただきました。

## 石井 公成

○早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学

○駒澤大学名誉教授

○『華嚴思想の研究』（春秋社）、『聖徳太子—実像と伝説の間—』（春秋社）

この浅草寺仏教文化講座は昭和三十年十一月、日本橋鑑橋辺にあった安田生命本社講堂を会場（以後新宿明治安田生命ホール、現在は丸の内マイプラザホール）として、故竹村吉衛門翁（当時、浅草寺信徒総代・安田生命社長）のご助言とご配慮により、浅草寺の境内を離れ、誰もが自由に聴講できる形で開設、開講されました。

以来、毎月一回開催し、政治・衣食住・医学・芸術等の文化各界および仏教・宗教界から講師をお招きし、計二講座をそれぞれの専門領域からご講演を頂戴してきましたのです。本書はその第二講座の講演録に当たります。

戦後の復興期より今日に至るまで、知を希求する人々の心を潤す辻説法として、同様の催しでは全国的にも先駆者の役割を果たしてきたものと思われれます。

浅草寺  
——佛教文化講座——  
第66集

令和四年八月一日印刷  
令和四年八月一日発行

編集者 清水谷 尚 順  
発行者 浅 草 寺  
印刷者 加 藤 秀 明  
印刷所 品川区大崎一―十五九  
光村ビル九階  
新村印刷株式会社

非売品